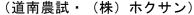
## ねぎの苗立枯病 (病原の追加)

平成30年3月、渡島地方のハウス栽培ねぎ(育苗期・地床育苗・播種1ヶ月後)で、不出芽 および出芽後の立ち枯れ症状が発生した。病変部から分離した糸状菌の菌糸幅は 7.2~10.4(平 均 8.7) μm, 核数は 4~14 個、菌糸は分岐を有し、分岐部がくびれ、分岐部付近に隔壁を有し た。分離菌は *Rhizoctonia solani* Kühn AG-1~5の標準菌株のうち AG-2-1 と高頻度、AG-2-2 IV と低頻度で融合した。分離菌は5~30°Cで生育し、25°Cおよび 30°Cにおける菌糸伸長は 11.6 ~11.7mm/24 時間および 0.4~0.6 mm/24 時間であった。分離菌の DNA からは AG-2-1 特異的プ ライマーを用いた PCR 法で DNA 断片が増幅された。また、分離菌の rDNA-ITS 領域の塩基配列 を解析し系統解析を行った結果、分離菌株は R. so/ani AG-2-1・Subset1 (培養菌叢に基づく 分類では培養型Ⅱ)に所属することが明らかとなった。地床育苗を想定して分離菌を播種と同 時にネギに接種したところ、不出芽および出芽後の立ち枯れ症状が再現された。一方、チェー ンポット育苗を想定して、分離菌を播種1ヶ月後のねぎに接種したところ、葉鞘部の腐敗が生 じたものの立ち枯れ症状は発生しなかった。接種による発病部からは接種菌が再分離された。 以上のことから本症状をネギ苗立枯病と同定した。接種試験の結果から本症状は、地床育苗で のみ発生すると考えられた。我が国では、ネギ苗立枯病の病原として AG 未同定の R. solani が 報告されているのみであり、*R. so|ani* AG-2-1・Subset1による同病の発生は国内・道内で確 認されていない。





ねぎの苗立枯病 (角野氏 原図)